

聖書：ヨハネ 20：19～23

説教題：あなたがたを遣わす

日時：2019年4月21日（イースター朝拝）

この箇所はイエス様が復活した日、初めて弟子たちが集まっていたところにイエス様が現れた時の記事です。週の初めの日すなわち日曜日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていました。イエス様の弟子たちにとってこの数日間は悪夢でした。約束のメシヤと信じてついて来た先生、イスラエルを救ってくださる救い主と信じて望みをかけてきたお方が、十字架刑にかけられてしまった。そして無残な死を遂げた。彼らは失意のどん底にありました。そして師がそのようにされたということは、次は弟子である自分たちの番ではないか。今にもユダヤの当局者たちが捕まえに来るのではないか。そのように恐れて彼らは部屋にカギをかけて震えていたわけです。そんな彼らはすでにこの日のニュースも受け取っていました。今日の箇所の前にはマグダラのマリヤが復活したイエス様に会ったことが記されていて、その彼女は弟子たちにそのことを告げたと 18 節にあります。またルカの福音書を見ると、この日エマオという村に向かって歩いていた二人の弟子にイエス様が現れたこと、その彼らはエルサレムに引き返して来て、ここに集まっていた弟子たちにそのことを告げたこと、またペテロにイエス様が先に現れたこと等が記されています。弟子たちはそのようなニュースに接して、どう受け止めたら良いのか、困惑と混乱のただ中にもあったことでしょう。

そんなこの日の夕方、突然イエス様が来て、彼らのただ中に立たれました。私たちはまずイエス様のこの登場の仕方の不思議さを思わずにられません。この部屋には鍵がかけられていました。ですから外部からは黙っては誰も入れない状態であったはずですが、ところがイエス様は突然、彼らの真ん中に立たれました！これは復活後のイエス様の体が、以前とは異なっていることを示唆します。イエス様は復活前にも色々な奇跡を行われましたが、このようなことはありませんでした。しかしこの日、イエス様が復活された時、墓の中に亜麻布は巻かれたまま、そこに置いてありました。まるで包まれた状態からスルッと抜け出たような状態がそこにあったわけです。また先の子どもにも分かりやすいお話において、女たちが墓に来た時に、入口をふさいでいた石が転がって、その上に天使が座ったことをお話ししましたが、その時すでにイエス様の体はそこにありませんでした。つまり墓の入口の石が開けられる前にイエス様は墓から出ていたわけです。今読んでいる箇所と同じです。また他の箇所からも復活後のイエス様は確かに復活前の

イエス様と同じ方ではあるけれども、同じようには見えないという印象も与えられたことが伺えます。つまり復活後のイエス様の体には、復活前の体とは違う側面もあるということです。イエス様は前と同じ状態に戻って来たのではなく、一言で言えば栄光の状態に入られたのです。私たちが住むこの地上的にあり方に縛られない状態に入ったのです。

さて彼らの真ん中に立たれたイエス様は何と言われたのでしょうか。その第一声はこうでした。「平安があなたがたにあるように。」これは何と素晴らしいメッセージを語るものでしょうか。人間的に考えれば、イエス様が別の言葉を語られる可能性もありました。ここにいた弟子たちはイエス様を見捨てて雲の子を散らすように逃げて行った人たちでしたから、イエス様が彼らの前に現れて最初に「よくもわたしを裏切ってくれましたね」と言ったとしてもおかしくありません。あるいは彼らを責める目をもって、黙って立っておられてもおかしくありませんでした。もしそうだったととても怖いですね。しかしイエス様の最初の言葉は「平安があなたがたにあるように」というものでした。これはヘブル語のシャロームに対応する言葉で、「神の祝福があなたにあるように！」という意味のユダヤ人の挨拶言葉でした。イエス様はまずその祝福の言葉を語ってくださったのです。

そしてこれは挨拶以上の言葉だったと考えられます。ご存知の通り、聖書言語における「平安」という言葉は「平和」と同じです。そして聖書が語る平和の基本的意味は、何よりも「神との平和」です。神との関係において平和であることが、私たちが持つ平安の基礎です。人間は生まれながらの状態では神と平和の関係は持っていません。人間は神の前に罪人だからです。むしろ神と敵対関係にあり、神の御怒りの下にあると聖書に言われています。そのような人間は、そのままでは真の心の平安は持っていない。しかしイエス様はこれをもたらすことができる。それは十字架の死を通してということなのです。

20節でイエス様はご自分の手と脇腹を弟子たちに示されました。彼らは主を見て喜びました。自分たちの前にいらっしゃるのは本当にイエス様だと確信したからでしょう。十字架につけられて死んだはずの私たちの師が、死の力を打ち破ってここに生きておられる！このいのちが勝利する世界に接して彼らは大変な喜びに沸きました。しかしイエス様がここでご自分の手とわき腹を彼らに示したのは、単にわたしはあの十字架につけ

られたイエスだよ、と示すためだけではなかったと思います。イエス様は「平安があなたにあなたにあるように」と語られましたが、その言葉は手とわき腹に見られる傷とセットであるということです。つまりイエス様がこの平安を彼らに与えることができるのは、ご自身が彼らの代わりにさばかれたからなのです。またイエス様が求めるすべての人にこの平安をもたらすことができるのは、そのすべての人のために十字架について、身代わりを受けるべき罰を受けてくださったからなのです。この事実と切り離して「平安があなたにあるように」という祝福を誰も与えることはできません。イエス様は十字架を経て復活した方として、この真の平和・平安を与えることができるのです。

私たちはこの平安の祝福をイエス様から受け取っているのでしょうか。私たちも神の前に罪を犯した者また今なお犯している者として、そのままではさばきに値する者です。そういう私たちはいくら自分の心に向かって「平安を持て！」と念じても、あるいは何らかの心理的操作を行っても、それを持つことはできません。神から離れた状態では誰もこれを持つことはできないのです。しかしどんな罪人に対しても、イエス様は私たちのために十字架上で死に、身代わりにより刑罰を受けてくださった方として、「神との平和があるように！」との力ある言葉を語ることができるのです。これは私たちの人生を根本から変える祝福の言葉です。私たちはこの世を歩む中で色々なことを経験します。ここはまだ天国ではないため、苦しいこともたくさんあります。しかし神との平和を持っている人はどういう人生を歩むのでしょうか。ローマ人への手紙 5 章 1~2 節には、信仰によって義と認められた私たちは今や神との平和を持っていますと述べられています。そして神との平和を持っている私たちは、将来あずかる神の栄光を望んで大いに喜んでいきますと語られています。今、神との平和を持っている人は、将来についての非常な確信と望みを持てるのです。神と正しい関係にある人を、神がどうして悪くされるのでしょうか。神はすべてのことを支配しておられ、あらゆることを通して私が必ず最後の栄光の状態に達するようにと導いてくださる。それゆえに続く 3~5 節には患難や試練さえも喜ぶと語られます。これは神との平和を持っている人が持つことのできる素晴らしい確信です。私たちはイエス様が語ってくださったこの「平安があるように」というお言葉を、自分への言葉として受け入れたいと思います。そして死で終わりではなく、いのちが勝利するという祝福に生かされる者とされたいと思います。

イエス様はここでもう一つのメッセージも語られました。それは 21 節以降にある「派遣」のメッセージです。これもイースター当日にイエス様が弟子たちに語った言葉です。

ですから私たちは片方だけ聞いて片方は捨てるというようなことはしないで、この二つ目の言葉にも良く耳を傾けて行くべきです。イエス様はその際、もう一度「平安があなたがたにあるように」と繰り返されました。このことはいかにこの平安についてのメッセージが大事であるかを強調しています。またこのように言うこともできます。派遣についての言葉を聞く際にまず大事なのは、この主が下さる平安をしっかりと自分のものとするところである、と。自分が心から喜びとすることを、私たちは他の人にも伝えたいと思います。自分の内にだけしまっておくことはできなくなります。誰かに分かち合いたくなります。ですからイエス様が下さる平安を自らが十分に味わい、これを心から喜ぶことが派遣の基礎です。

そしてイエス様はこう言われました。「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」これで宣教についてとても大事な真理が語られています。まず言われていることは、宣教の働きは神からスタートしているということです。神が御子イエス様を遣わしたところが出発点です。宣教の主は神ご自身です。これは神から出て、神が進めているプロジェクトなのです。そしてもう一つ注目すべきは、イエス様が私たちを遣わす際、私たちにこの働きをバトンタッチしてご自身は休まれるというわけではないということです。「父がわたしを遣わされたように」という部分はギリシャ語では完了時制で語られています。これは過去に始まったことが現在も継続している状態を表す時制です。つまりイエス様が父なる神から遣わされているという状態は終わりになったわけではない。イエス様が父に遣わされている状態は継続しています。イエス様は引き続き、このために働かれるのです。そう考えると、これは何と素晴らしいことでしょうか。宣教は今もって神の働きであり、キリストが先頭に立って導かれる働きです。そのキリストに導かれて、キリストとともに神のわざに当たるようにと私たちも招かれているのです。

しかしイエス様を裏切った弟子たちに、また同じく頼りにならない私たちに、この働きは担えるのでしょうか。イエス様はそのために 22 節で「聖霊を受けなさい」と言って息を吹きかけられました。イエス様が聖霊を本格的に注ぐのは、この後、使徒の働き 2 章のペンテコステにおいてです。イエス様はこの聖霊を通して、天に昇られたご自身と地上の信者たちをつなぎ、上からの恵みを豊かに注いでくださいます。その聖霊の助けによって、弟子たちが目覚ましい働きをする様子が使徒の働きに描かれます。その前触れとしてイエス様はここでこのようにされました。つまり彼らが、また私たちが、こ

の使命に取り組むのは単なる人間の力によるのではないということです。聖霊を受け、イエス様の恵みに強められて、この働きを遂行する者にされるのです。

最後の 23 節は、私たちにいかに大変な権威が与えられているかを語るものです。これは私たちが出会う人出会う人に、好き勝手に「あなたを赦します」と言えばその通りになり、逆に「あなたは赦しません」と言えばその通りになるという意味ではありません。これは福音宣教の使命との関連で語られている言葉です。私たちが福音の言葉を正しく語る限り、その私たちの言葉を通して、ある人の罪が赦され、あるいはその福音を受け入れない人の罪が残されるという結果が起こる。罪を赦す権威を持っているのはあくまで神ですが、それが現実になされるための道具として私たちは遣わされるのです。信用ならない者たちとして、何の権威を与えられないで、ただ行きなさいと言われていたのではなく、私たちの行く先々で人々の罪が赦され、あるいは残されるという神の働きが現実になされるための器として遣わされるのです。

私たちは今日のイエス様の御言葉に基づいて、自分が「遣わされている者」であることを知っているでしょうか。「派遣される」と聞くと、私たちは誰か特別な人のことだと思いがちかもしれません。宣教師とか牧師とか、特殊な人たちのことであると。そしてそうではない普通の信徒である私は、別にどこかへ遣わされているわけではない。しかし今日の御言葉を良く考えれば、そうではありません。イエス様は私たち一人一人を遣わすと言っています。私たちはイエス様によって遣わされている者たちなのです。そういう意味では私たちも一人一人、宣教師なのです。この世に対して、また日本という国に、またそれぞれの置かれているところに、神の働きをさらに推し進めるために遣わされた宣教師として。

そのためにも私たちはイエス様が復活後にまず言われた「平安」の祝福をしっかり受け取り、これを大いに喜ぶ者でありたいと思います。この世にあって私たちはなお様々な困難を経験しますが、イエス様は招詞で読んでいただいたヨハネの福音書 16 章 33 節でこう言われました。「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」 この平安をいただいて、イエス様が与えてくださっている使命に邁進したいと思います。イエス様の恵みにあずかった私たちは皆、遣わされている者たちです。キリストがあなたがたを遣わすと言っておられます。一人

一人を宣教師として、この世に、また日本に、そしてそれぞれの生活している場に。私たちがどのように感じていようとも、主が私たちに派遣しておられるという事実は動きません。そのことを受け止め、この栄えある派遣に応えて行く一人一人の歩みまた教会の歩みへとさらに導かれて行きたいと思います。